

## 助け合う女たちの家政婦会

本郷 伸枝 中町在住

一九一八（大正七）年生まれ

### 夫の出征と空襲

私は栃木県の足利市で生まれたのですが、まもなく父が東京の赤坂で建築関係の請負業を始めまして、そこで育ったのです。兄が二人いる三人兄妹でした。次兄は結婚でしたので、長い間寝ていましたが二六歳で亡くなりました。

私も兄の結核がうつったのか、とても弱かったですよ。ですから尋常小学校しか行けなかったんです。家のなかにはかりおりましたが、運動のために日本舞踊はさせられました。

二〇代に入り私も少し元気になることができましたので、看護婦の見習いに病院で働いたことがあったんです。資格を取ろうと思いましたが、しばらくしたら長

兄から「友達の本郷君がお前を嫁にもらいたいと言っている」と言われて、昭和一六年の三月に結婚したんですよ。

当時、主人は自分の実姉の嫁ぎ先が海と陸の運送業をしていて、そこで働いていたんです。

住んだのは麻布でした。長男が昭和一八年に生まれました。でも、楽しい生活もつかの間、一九年に出征の知らせが届いたんです。ただ、ちよつと思議だったのは「絶対に秘密で来るように、浴衣がけでいいから」と言うんです。結局普段の背広でほんの二、三人で見送りました。ところが一年ほど復員してきたんです。ミンダナオ島にいたということ、ひとりだけ船に乗せて帰されたんだそうです。

その頃になると東京も危なくなり、とりあえず私と子どもだけ主人の実家の福島に疎開をしたんです。主人は麻布に残り、そこで空襲の爆撃で亡くなりました。二〇年の五月二六日でした。弟が焼け跡から骨を拾い集めて福島まで届けてくれました。

私はあの日のことは話したくないんです。あまりの辛さに。とにかく、ものが考えられなくなり寝ついてしまいました。虚脱状態のまま終戦になりました。ですから八月一五日のことは何にも覚えていません。

戦争が終わると間もなく、長兄が三鷹の知人を頼ってそちらに移ることにになり、私たち母子を引き取ってくれ、一緒に三鷹に来たのです。

そこで兄がやった仕事は、アメリカ人のためのダンスホールだったんです。彼らが悪さをしないように、という対策だったらしいのですが、これは失敗で、お金はカラになってしまいました。

そこで、三鷹の駅の北口駅前では今度は不動産屋さんを始めました。兄がその不動産屋の裏に三畳と台所のついたバラックを建ててくれました。そこで子どもと暮らしながら店の手伝いをしました。ほんちくな私ですが、兄はほんとうによくしてくれました。もう亡くなりましたけれど。

### 私に向いている仕事？

しばらく兄のもとで手伝ってましたが、あいかわらず私は体が丈夫ではなかったです。でも子どもが少し手がからなくなりましたし、何か自分で仕事をしなければ、と考えていました。友だちが「あなた自身が労働をしたら生きられないから、家政婦会なんか向いているんじゃないの」と言うんです。それがきっかけで「<sup>はじめ</sup>家政婦紹介所」をつくりました。「はじめ」というのは子どもの名前の一字を



「<sup>はじめ</sup>家政婦紹介所」の前にて

使ったんです。

ここに兄が一五坪の二階家と、裏に家政婦の寮を建ててくれ、看板を掛けたのが昭和三〇年。結婚前に一時病院に勤務していたことが、こんなに役立つとは知りませんでした。私は、そのときから家政婦として来てくれる人たちが、他人のような気がしないんです。もちろん、いろいろな事情をもって働く人が多いので「しばらくこの家で疲れを取りなさい」とか「一緒に暮らしましょう」と言って、共にがんばる友だちのような感じでした。だから過去は聞かないんです。ご主人を亡くされた方、離婚も多かったです。私も主人のことを話すのはとても辛く、悲しい思いをするものですから。

今は、在日の外国人女性が働く場合もあります。でも、家事の基本的なやり方や考え方が違うのでしようか、あまり長続きしないことが多いです。ここには、近在の方が大勢働きに来てくれます。それに、今は介護二級の資格がないと病人のお世話はで

きないんです。でも、世の中が変わっても病人は出るし、食事も必要ですし、家政婦の仕事ってあまり不況はないですね。

今まで働きづめで、子どもとは朝食だけしか一緒にたべられませんでした。朝は三時半か四時に起きて洗濯と掃除をしまわうんです。そしてご飯を食べながら、おたがいに何でも話しましたよ。入学式は行ったと思いますが、PTAには行ったことがありませんでした。でも子どもは家の中で私を視野に入れることはできませんでしたからね。母子でべったりはなかったです。

#### 安心できる高齢者のための「親の家」

私は若いときからこのような施設をつくるのが夢でした。家政婦会を通して見ていると、老いて病気になるあまり大事にされなくなるものなんですね。まあ、事情はいろいろあるでしょう。そんなことを聞くうちに、いつか建てることができたら、と

いう気持ちが強くなりました。感謝や、優しさのある所で皆と一緒に暮らしたいと思っただけです。

特別養護老人ホーム「親の家」という施設名にしたのは、子を思う親の気持ちになって、親の家のように安心していられる所と考えたんです。ですから「いらっしやい」でなく「おかえりなさい」と言ってもらいます。

でも、一番楽しいのは「一家政婦紹介所」のこの部屋です。知恵と力のない女が子どもを育てながら一所懸命に仕事をしてきた場所です。

(〇二年四月 浜)

